



横須賀版 学校運営協議会だより

学校が地域の中の学校であり続けること

～地域と共に創る学校 地域に愛される学校 地域を愛する子どもを育む学校～

日頃より学校運営協議会に係る様々なお取組に御礼申し上げます。

本紙は、令和4年度から横須賀市内全学校に設置された学校運営協議会をより充実した組織にしていくために発行しているものです。



R4

学校運営協議会だよりの前身は、令和4年度2月の学校教育だよりに第1回学校運営協議会情報交換会の様子や、4つの協議会の様子を取り上げ、お知らせした特集でした。



R5

令和5年度から発行が始まりました。“学校運営協議会は学校の数だけその形がある”とよく言われる中で、様々な学校運営協議会の熟議とそこから派生した地域と学校の協働活動を紹介しました。



R6

令和6年度には、コーディネーターの事例を学校と行政の視点からインタビュー形式で紹介しました。

このように、横須賀市で目指す学校運営協議会の理念や市内の協議会の好事例、他地区の情報などの発信を続けています。

今回は、桜小学校と馬堀小学校の事例を紹介します。各学校の実態と照らし合わせて今後の学校運営協議会の在り方について考えていただくヒントになればと思います。

桜小 学校運営協議会委員平野さんと川上校長に聞く



“サクラのミカタ”に込めた 地域と学校の思い

市内小・中学校での校長経験があり、現在は桜小学校の学校運営協議会委員を務め「サクラのミカタ」の事務局である平野はるひさんに話を伺いました。

サクラのミカタとは

「子どもたちを応援する、地域の皆様によるサポートチームのこと」と定義し、桜小の教育活動の中で学校職員が抱える様々なニーズに地域の方で応えようとする取組です。「サクラのミカタ」という地域と学校をつなぐ組織があることで、日常の教育活動に地域の方の力を生かせるのではないかと、という発想が第一にありました。

さらに、先生方と地域の方との調整に伴う負担を軽減するねらいもありました。日程の調整はもちろん内容の調整も必要です。そうした調整に伴う先生の負担を減らそうと考えました。

このような背景の中で、令和4年度に「サクラのミカタ」の構想について当時の校長先生に相談しました。その後、学校運営協議会で提案すると、他の委員さんから「やってみようよ」

「やりながら考えてみよう」と前向きな回答をいただくことができました。

事務局がつなぐ学校と地域

今までも学校と地域がつながる活動は様々ありました。その主なつなぎ役は教頭先生でした。その代わりに事務局が間に入ることで学校の負担を減らしつつ、活動が日常化できることをねらっています。動き出しの今、事務局は私が務めています。

年度初めにどんな学習で「サクラのミカタ」の活用ができるか先生方にアンケートを取っています。事務局でそのアンケートを基にお知らせを作成し、町内会から地域に学校のニーズを周知してもらい、参加者の募集をしています。

コーディネーターとしての意識

学校の迷惑にならないこと、先生方に負担感を抱かせないこと、先生方が地域に依頼するというハードルが下がることを意識しています。学校の先生にとって地域の方へ協力をお願いします

ることには高いハードルがあるのではないかと
思うからです。特に子育て中の先生は時間をと
って地域とつながる学習をつくることはさらに
難しいと感じています。だから、いろいろな先
生に気軽に相談してほしいと思っています。

深く濃くではなく、薄く広くでよいのです。
場合によってはもっと深く関わりたいという先
生もいらっしゃるでしょう。そこは先生方の裁
量。事務局は「仲人」です。裾野を広げること
が大事だと思っています。

地域の方の参加のハードルが下がることも必
要です。地域の方で「私が参加することでかえ
って迷惑をかけるのでは」と心配する声をよく
聞きます。ミシンの学習補助などの実践が恒例
になり学校とつながることが楽しいと思えるよ
う工夫していきたいです。

学校運営協議会の熟議を生かして

前回の運営協議会で、PTA 役員の委員さんか
らベルマークの仕分けを「サクラのミカタ」で
やってはどうか、という提案がありました。み
んなで作業しながらお話もでき交流になるし、
誰でもできる活動です。PTA 活動も学校によっ
てはサポーター制度(※1)にするなど変わり
つつあります。そんな中で「サクラのミカタ」
のような活動ができるといいと考えています。

学校が保護者に声をかけてお願いをした活動
があれば「サクラのミカタ」につなげることも
できます。それが続けられたら保護者が地域に
つながる顔つなぎになります。地域も若い担い
手、後継者がおらず困っています。地域の活性
化にもつながっていくのではないのでしょうか。

今後の展望——平野さんより

学校にスクールサポートスタッフ(※2)が

導入された時は、「こんなこともやってもらえ
るの。」「(時間ができて)こんなことができる
ようになった。」と先生方から喜びの声が多く
聞かれました。先生が指導に集中することがで
けるように、地域の力でも学校の負担を減らす
ことができると思います。ささいなこと、地味
なことでも、学校をサポートしたいのです。

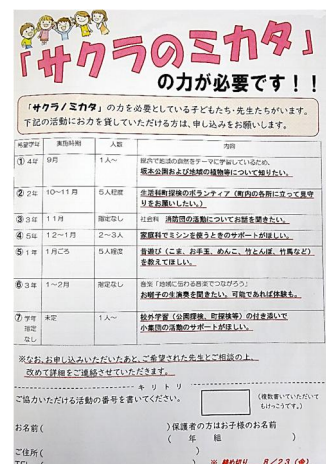
繰り返しになりますが、何より学校と先生
方、地域の方のハードルをいかに下げるか、そ
れが一番のポイントだと思います。そして双方
のニーズが増えてきたら組織化ができます。そ
うして軌道に乗るところまで様々な手立てを提
案しつつ進めていくのが私の役目だと思ってい
ます。

今後の展望——川上校長より

桜小の教育活動の中で、この場面で「サクラ
のミカタ」が必要だという認識が、職員個人の
レベルではなく、学校組織として共通認識が形
成できるといいと考えています。今は特別支援
級や低学年を中心に校外学習等でのニーズが多
くなっています。「サクラのミカタ」の存在
が、漢方薬のようにじりじりと効いてくる。そ
れが先生方の負担減
につながると考えて
います。

※1：PTA サポーター制度
…「できる人が、できる時
に、できることを」をモッ
トにイベントや活動ごと
にボランティアを募り活動
を行う仕組み。

※2：スクールサポートスタッフ…教員の負担軽減を図り、
児童生徒への指導や教材研究等に注力できる体制を整備する
ため、教員に代わって資料作成や授業準備等をサポートする
スタッフ。



馬堀小学校の取組

学校長のビジョンから広がる 地域と学校の連携・協働

走水小学校と馬堀小学校が統合して1年目。昨年度まで走水小学校の校長であり、現在は馬堀小学校の校長を務める中川幸太校長に学校運営協議会での提案から実際の活動につながったお話を伺いました。

学校教育目標が常に意識されるように

昨年度、馬堀と走水が一緒になったことの価値をみんなが感じることができるよう、両校の教職員が様々な内容について話し合いを行いました。その中で、学校教育目標を『自ら「考え」「伝え」「認め合い」、ともに楽しく学び合う子』としました。この学校教育目標を、学校・地域・家庭、そして子どもたちと共有するために、日頃から発信をしています。

マスコットキャラクターをつくりたい！

学校教育目標にある「考え」「伝え」「認め合い」の言葉の頭文字を取り、『「か」「つ」「み」と「ともに!』というキャッチフレーズにしてその定着を図っています。さらにそこから、マスコットキャラクターをつくることで、より強く定着させたいと考えました。

そこで、学校運営協議会で情報共有を図ったところ、地域にデザインが得意な方がいらっしゃるということがわかりました。委員さんに紹介していただき、その方とつながることができました。

デザインがつなぐ連携・協働

その地域の方に相談をすると「子どもたちにキャラクターを募集してはどうですか。」という提案をいただきました。そして、子どもたちのアイデアをもとに、キャラクターを作成していただけることになりました。



馬堀小学校マスコットキャラクター 「かつみん」

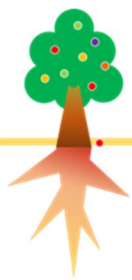
馬堀をイメージする馬をモチーフとし、体の水色と波の形をした尻尾は走水を表現している。全体として、馬堀と走水が一緒になったことを表している。

学校教育目標の「考え」を表す?の形のたてがみ、「認め合い」を表す胸のハート、「伝え」を表すハートの中のマークなど、子どもたちのアイデアが詰まっている。

夏休み前の朝会で「夏休み中に馬堀小学校のキャラクターを考えてほしい。」と子どもたちに呼びかけてアイデアを募集したところ、任意の参加であったにも関わらずたくさんのキャラクターが届きました。その中からエッセンスを抽出し、地域の方の手で一つのデザインにまとめていただきました。そして、マスコットキャラクター「かつみん」が誕生しました。

地域の方が手描きで作成した「かつみん」を、今まで学習に協力をいただいている関東学院大学共生デザイン学科の学生さんがデジタル化してくれました。

晴れて完成した「かつみん」は後期始業式で児童にお披露目することができました。今後も様々な場面で活用し、学校教育目標の実現に向けて活躍してもらおう予定です。

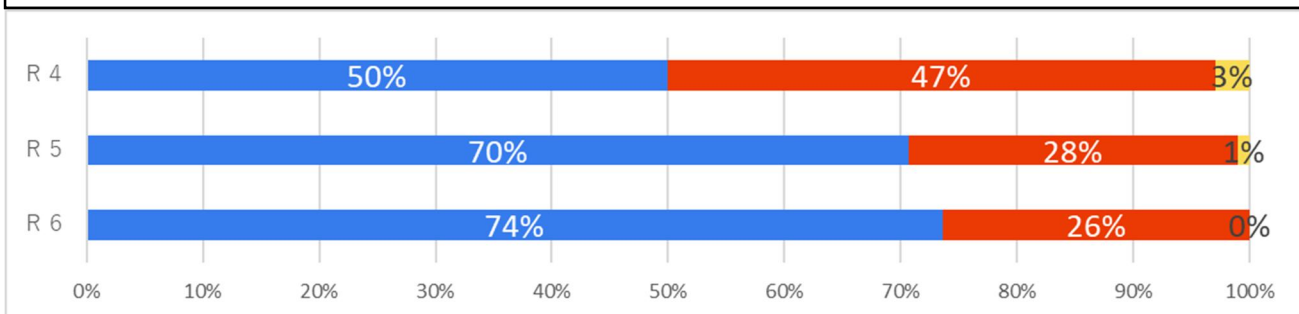


学校運営協議会アンケートから 現状と今後の展望を考える

学校運営協議会の推進状況を把握するために、毎年アンケート調査を行っています。回答数は令和4年度 委員 326名、令和5年度 委員 315名、令和6年度 委員 323名、学校は全ての学校長に回答をいただきました。3年間のアンケート結果から見える成果と課題について紹介します。

学校長アンケート

協議会では、学校教育目標や学校として育てたい子ども像、学校運営のビジョンなどが共有されている。

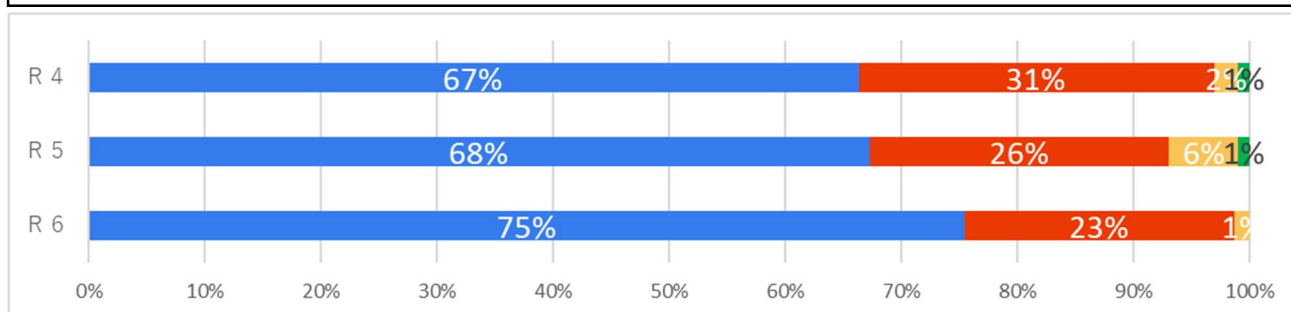


■ できている ■ おおむねできている ■ あまりできていない ■ できていない

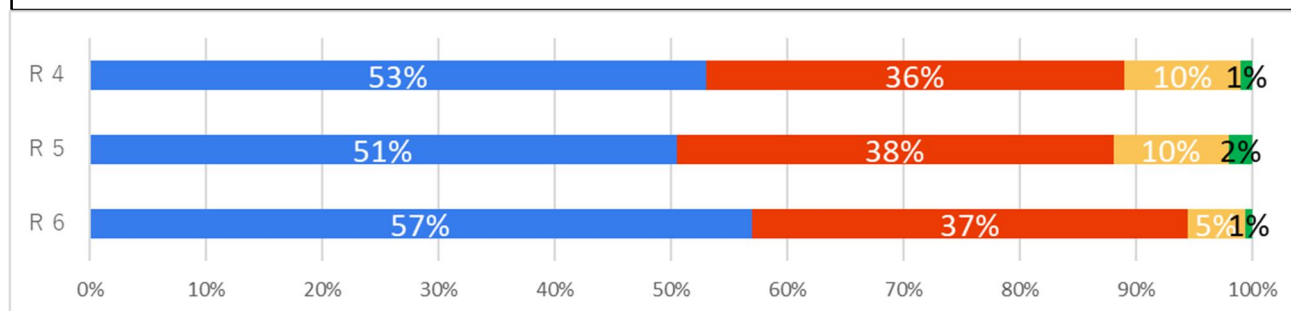
学校長のアンケート結果は、多くの回答で肯定回答の上昇が見られました。上のグラフが示す目標の共有に関する質問は、昨年度の上昇からさらに肯定回答率が伸びました。この四年間で、学校運営協議会の理念や進め方についての理解は広まってきていると考えられます。

委員アンケート

協議会では、質問①（学校教育目標等の実現）に向けて、具体的な取組や支援について協議している。



協議会で議論したことによって、学校や地域の具体的な取組につながることがある。



委員アンケートについても、肯定的回答が全体的に増えている一方で、上の2つの質問については、他の質問と比べて「できている」の回答率がやや低く、大きな変化が見られません。「できている」「おおむねできている」を合算した肯定的回答は高く推移しているものの、十分にできている、とは判断しかねるご意見が根強くあることが考えられます。

上の2つの質問は、学校運営協議会の熟議が、具体的な取組につながっているかどうかを問うものです。学校運営協議会は、学校の教育目標やビジョンを共有し、地域、保護者、学校が熟議を重ねる場であり、必ずしも具体的な取組を実行しなければならないわけではありません。しかし、この4年間を通してたくさんの熟議が行われ、様々な取組・支援について協議が重ねられてきました。その結果、今回取材した2校の取組を始め、今まで実現できなかったことが、学校運営協議会の場から生まれ、広がり始めています。

今後も、学校運営協議会のさらなる活性化を図り、学校と地域との協働を一層進めていくため、情報発信に努めるとともに、様々な施策を講じてまいります。